レポート課題

レポートの課題は「マクロヒストリーの古典を一冊読み、それに関するレポートを A4 で 2 枚以内にまとめよ」です。日本語だと 3000 字程度、用中文写的话 2000 字左右、in English, write 1100-1200 words.

レポートと期末試験の配点は半々、または 40:60 ぐらいの予定です。つまりレポートを提出しないとほぼ確実に不可または未受験になります。

レポートにおいては内容の紹介とそれに対する評論とのバランスを心がけてください。内容紹介だけ、あるいは評論だけというものはあまり評価できません。内容紹介はそのテキスト全体を取り上げるよりも、自分が論じたい論点に絞って紹介したほうがよいと思います。（字数も限られているので）

ユニークな切り口からのレポートは大歓迎です。例えば、「『資本論』から 19 世紀イギリスの労働者階級の状態を読みとる」とか。

言うまでもないことですが、剽窃（ひょうせつ＝他人の文章を、そうだと表示せずに自分の文章の中に入れること）はしてはいけません。必ずバレます。もちろん、他人の文章や見解を引用することはかまいません。

引用のしかたの一例（Word の脚注機能を使っています）：

アジア的生産様式に関して、マルクスとエンゲルスは 1853 年に交わした手紙のなかで、アジアには土地所有が欠如していて小さな村落に分かれている、また、アジアは乾燥していて大規模な灌漑施設が必要なので専制的な国家が成立する、と書いている[1]。

上記のように引用してくれれば文句ありませんが、授業のレポートですからそんなに厳密でなくても大丈夫です。

以下は私が本講義のために読んだ本です。すべて日本語訳を紹介しておりますが、もちろんそれぞれの原書を読んでもいいし、訳書を読んでもいいです。これ以外でも「マクロヒストリーの古典」だと思われる本があったら取り上げて下さってかまいません。

提出期限：2014 年 1 月 15 日（水）

マクロヒストリーの古典

一字下げの本は「古典」ではなく、古典の解説書。そこで解説されている古典は入手が難しいと思うので代わりに挙げました。

ヘーゲル（長谷川宏訳）『歴史哲学講義』（上・下）岩波文庫

---

[1] マルクス（手島正毅訳）『資本主義的生産に先行する諸形態』大月書店、1963 年、84 ページ。

私は旧訳（武市健人訳）で読みましたが、新訳になって圧倒的に読みやすくなってうらやましいです。

エンゲルス『空想から科学へ』岩波文庫
マルクス主義の全貌を一冊で知るのに最適の本

マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』
マルクスとエンゲルスが 1845 年に書いて、そのままネズミにかじられるのに任せていた原稿。二人が初めて唯物史観を確立した書であるが、決して読みやすいものではない。

マルクス『資本論』第１巻（といっても文庫本３冊です）
マルクス経済学を専攻するのでなければ第１巻だけ読むことをお薦めします。ヘーゲル哲学を意識した商品・貨幣のあたりはやや難しいですが、19 世紀のイギリスの世相も描いた「絶対的剰余価値の生産」のあたりは面白おかしく読めます。第２巻・第３巻は難解で、エンターテイメントの要素もありません。

廣松渉『マルクス主義の地平』勁草書房、1969 年
騒然とした 1960 年代の日本で、実存主義や構造主義といった当時の哲学の流行に対して、マルクス主義がいかに新しいかを説いた書。

エンゲルス（戸原四郎訳）『家族・私有財産・国家の起源』岩波書店、1965 年。
アメリカの文化人類学者モーガンの『古代社会』が期せずして唯物史観を裏付けるような議論を展開していたので、マルクスとエンゲルスは注目し、エンゲルスがマルクスの死後、モーガンの議論に自らの勉強成果も加える形で完成しました。「家族」のところは「１８禁」の議論が展開されます。

宇野弘蔵『経済政策論・改訂版』弘文堂、1954 年
資本主義の発展段階を論じた本。原理論、段階論、現状分析という「三段階論」をなぜとらなければならないかについても論じている。古風な日本語を堪能してください。

長岡新吉『日本資本主義論争の群像』ミネルヴァ書房、1984 年
唯物史観の公式と戦前（1920-30 年代）の日本の現実の狭間で煩悶した日本のマルクス経済学者たちの論争

鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』講談社、2000 年
歴史人口学で日本史を見るとどう見えるか。特に江戸時代の様子が詳しく描かれます。

A.G.フランク（大崎正治ほか訳）『世界資本主義と低開発』柘植書房、1979 年
　従属理論の原典

吉岡昭彦『インドとイギリス』岩波書店、1975 年
　イギリス経済史家がインド旅行の印象をつづりながら、イギリスの発展の裏に植民地インドに対するさまざまな搾取があったことを議論する。岩波新書の歴史の中でも有数の人気を獲得した本である。

　森田桐郎（室井義雄編集）『世界経済論の構図』有斐閣、1997 年
　　森田先生は東大経済学部で「国際貿易」の講義を担当され、私も熱心に受講しました。この本はその時の講義の内容とほぼ同じだと思います。リカードやミルら古典派の貿易論、プレビッシュ＝シンガー命題、従属理論、世界システム論、不等価交換論、ハイマーやヴァーノンらの直接投資論などを丁寧に解説しています。先生の没後に先生のプランに従って弟子の室井先生が編集しました。

I.ウォーラーステイン（川北稔訳）『近代世界システム　Ⅰ・Ⅱ』岩波書店、1981 年
　世界システム論の原典。原文は難解らしいが、訳本は難解ではない。むしろ、面白いけれどつきあいきれない、という感想。

岩田弘『世界資本主義』未来社、1964 年
　宇野弘蔵の経済学の内在的批判という形で一種の世界システム論を提起した書。

　田中明彦『世界システム』東京大学出版会、1989 年
　　政治学の分野でとらえられた世界システム論に関する解説書。

アンドレ・グンダー・フランク（山下範久訳）『リオリエント　アジア時代のグローバル・エコノミー』藤原書店、2000 年
　従属理論で登場した著者が、世界経済の中心はアジア（中国）だったという新たな世界史像を提示した書。

浜下武志『近代中国の国際的契機』東京大学出版会、1990 年
　フランクも引用している中国中心の朝貢貿易システムに関する分析。

赤松要『経済新秩序の形成原理』理想社、1945 年
　アジアでもよく知られている「雁行形態論(flying-geese pattern of growth)」のオリジナ

ルは戦時下で書かれた欧米への対抗意識むき出しのこの本だ。

アレクサンダー・ガーシェンクロン（絵所秀紀ほか訳）『後発工業国の経済史』ミネルヴァ書房、2005 年
　経済学者や歴史家によって頻繁に引用される「後発の優位性」の原典。訳書で読んでも難解だ。

W.W.ロストウ著；木村健康［ほか］訳『経済成長の諸段階：一つの非共産主義宣言』
　副題の a Non-Communist Manifesto は「非共産党宣言」と訳して欲しいところです。

フランシス・フクヤマ（渡部昇一監訳）『歴史の終わり　（上・下）』三笠書房、2005 年
　ソ連の崩壊を見て「最後はリベラル・デモクラシーが勝つ」と確信した著者がヘーゲルを引っ張り出してきて歴史は終わると喝破した。現在読むといささかはしゃぎすぎの感もあるが、世界を視野に入れたスケールの大きな議論を展開している。

サミュエル・ハンチントン（鈴木主税訳）『文明の衝突』集英社、1998 年
　分析の当否はともかく「文明の衝突」をなんとか避けるよう努力しましょうよ。

梅棹忠夫『文明の生態史観』中公文庫、1974 年
　民族学者としてアフガニスタン、インド、パキスタンを旅行して得た発想。書かれていることは思いつきにすぎないし、「生態史観」というタイトルに中身が必ずしも沿っていないが、イデオロギー過剰な時代にあって自由な発想を貫いたことに敬服する。

ジャレド・ダイアモンド（倉骨彰訳）『銃・病原菌・鉄　1 万 3000 年にわたる人類史の謎（上・下）』草思社
　人間の社会自体の生産力よりも、生態環境、地形などによって人間集団の運命が決せされた例を数々紹介している。これこそ生態史観ではなかろうか。

ハジュン・チャン(横川信治監訳)『はしごを外せ』日本評論社、2009 年
　後発国が成長する上での保護主義の重要性を説いた書。

ダグラス・ノース（中島正人訳）『文明史の経済学』春秋社、1989 年
　財産権を守る制度があれば経済は発展するという経済史の学説で、ノースはノーベル経済学賞を受賞した。